

22	碧海	吉浜小学校	ニシ キョウヘイ 名前 西 恭平
分科会番号	02	分科会名	外国語教育

研究題目

相手のことを考えて、楽しく英語を学ぶ児童の育成
ーアルファベットクイズを用いた小学校3年生外国語活動の実践ー

研究要項

1 主題設定の理由

5月に実施したアンケートでは、本学級（男子15名、女子15名、計30名）のうち20名の児童が外国語活動を「とても楽しい」と答えていた（資料1）。英語の歌やリズムに合わせて声を出す活動に喜びを感じており、授業中だけでなく休み時間にも自然と英語の歌を口ずさむ姿が見られた。また、給食の時間の「おかわりじゃんけん」では、学習した英語のフレーズを使ってじゃんけんを始めたり、「How many 牛乳？」といったように身の回りの場面で自発的に英語を使って友達と会話をしたりする姿も見られ、英語に対する親しみや興味が高まっていると考えられる。また、「英語が話せるようになったら何をしたいか」という問いには、「海外旅行で現地の人と話したい」「外国の友達をつくりたい」といった、英語を使った交流への具体的な願いをもつ児童も多かった。

外国語活動では、「コミュニケーションの基礎となる素地を養うこと」が目標として掲げられている。これは、単に英語を発音したり語句を覚えたりするだけでなく、「相手に伝えたい」「相手と分かり合いたい」という気持ちを育てることである。そのためには、児童が自分の考えを相手に合わせて伝え方を工夫したり、相手の反応を意識しながら表現したりする経験が必要である。しかし、学級の児童には、「自分が楽しければよい」「相手がどう感じるかはあまり気にしない」という傾向も見られ、外国語活動においても「相手にどう伝えるか」を考える機会は少ないと感じた。さらに、小学校3年生は外国語活動を学び始める初期段階にあり、「英語って楽しい」「もっと話してみたい」と感じられる成功体験を積むことは、今後の学習への意欲を大きく左右すると考える。

そこで本研究では、シカゴ在住の小学生のスペンサーさんとの交流の場を設け、児童自身が問題と答えを考えるアルファベットクイズ作りに取り組むこととした。クイズは、「どのレベルなら相手が楽しめるか」「どんなヒントが分かりやすいか」といった、相手のことを考える表現活動である。自分で作ったクイズを友達や外国の友達に出題することを通して、「伝わった」「分かってもらえた」という実感を得ることができ、英語学習への自信や意欲の向上にもつながると考えた。

2 目指す子ども像

- I 相手のことを考えて、自分の表現や活動を工夫しようとする子
- II 英語の音や文字に親しみを持ち、楽しく英語を学ぶことができる子

3 研究の仮説と手だて

（1）研究の仮説

仮説Ⅰ

外国の友達や学級の友達に向けて発信する機会をもつことで、児童は「相手に伝わるように工夫しよう」という相手意識を高めながら英語を使おうとするようになるだろう。

仮説Ⅱ

帯活動や英語を楽しく身近に感じられる活動を継続することで、児童は英語の音や文字に親しみを持ち、楽しく英語を学ぶことができるだろう。

資料1 単元前アンケートの結果



(2) 仮説にせまる手だて

○手だてⅠーア 外国の人と継続的に関わる場面の設定

単元目標を「スペンサーさんにアルファベットクイズを出題する」と設定し、学習を構成する。その実現に向けて、①「スペンサーさんからのクイズに挑戦する」、②「スペンサーさんからのクイズの感想を聞く」場面を取り入れ、単元を通して外国の人と継続的に関わる機会を設定することで、児童の相手意識を高めることをねらう。

○手だてⅠーイ グループでの話し合い活動

スペンサーさんに楽しんでもらうアルファベットクイズを作成するために、どのような工夫ができるかグループで話し合う機会を設ける。グループで協力しながら相手に伝わるような工夫点を探ることで、児童は相手を意識したクイズ作りに取り組めるようにする。

○手だてⅠーウ 児童同士の間発表

自分たちで作成したアルファベットクイズを他グループと出題し合い、意見を交流する中間発表の場を設ける。予想していなかった解答に気付いたり、楽しさが十分に伝わっていない点に気付いたりすることで、自分たちのクイズを見直す機会とする。仲間の反応を踏まえて改善点を考えることで、相手を意識したクイズ作りへとつなげる。

○手だてⅡーエ 表現に慣れ親しむ帯活動の工夫

アルファベットへの親しみを高めるために、ゲーム性を取り入れたアルファベットの歌を歌う。また、アルファベットクイズで用いる英語表現に慣れることができるように、毎時間、全員でアルファベットクイズのチャンツに取り組む活動を行う。継続的な活動により、児童が英語表現に触れ続けることをねらう。

○手だてⅡーオ 英語を楽しく身近に感じられる英語活動の工夫

教室や校庭などの身の回りからアルファベットの大文字に見えるものを見つける活動を行い、その文字を基にアルファベットクイズを作成する。自分で見つけた文字を使うことで学習への興味関心が高まり、クイズ作りを通して英語の音や文字に親しみをもち、英語を楽しく学ぶことができるようにする。

4 研究の計画

(1) 抽出児童について

	実態	期待する姿
児童 A	アンケートでは、「英語は楽しいですか」は「あまり」、「英語を話せるようになりたいですか」は「まあまあ」、「英語の授業を進んで取り組んでいますか」は「ふつう」と回答。英語への苦手意識はないが、学習の楽しさや意欲は高くない。自分の考えを明確に発言できる一方、自分の主張を優先し、相手の意見に寄り添うことが難しい。英語の授業では積極的に活動するが、活動をこなしている印象が強い。	スペンサーさんという具体的な相手を意識する活動を通して、「相手に伝わるように工夫すること」や「相手が喜ぶことを考える姿勢」を身に付けることを期待する。また、自分で工夫したクイズを楽しんでもらえる経験を通して、英語学習そのものへの楽しさや自信を高めていく姿に期待する。
児童 B	アンケートでは、「英語は楽しいですか」は「まあまあ」、「英語を話せるようになりたいですか」は「あまり」、「英語の授業を進んで取り組んでいますか」は「あまり」と回答。英語活動には抵抗はないが、自分から発言したり伝えたりすることに苦手意識がある。自分の考えはもっているものの、相手に伝えることが苦手で、英語の授業でも表現する活動では消極的になることが多い。	アルファベットクイズ作りや中間発表など、自分の工夫を伝える機会を通して、相手に向けて表現する力を高めていくことが期待される。また、本単元を通して「英語を話せるようになりたい」という思いが高まる姿に期待する。

(2) 単元構想 (全7時間)

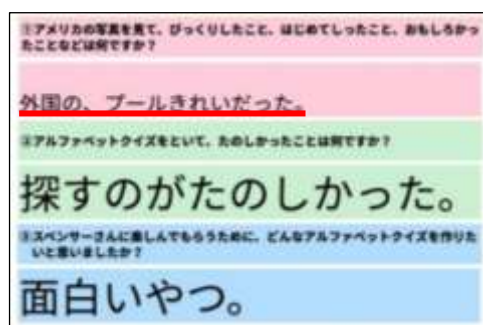
時	学習課題	研究の仮説と手だて
1	何のアルファベットが隠れているかな。	手だてⅠーア
2	身の回りにどんなアルファベットがあるかな。	手だてⅠーイ、Ⅱーエ、オ
3	どのような写真を選べば、アルファベットクイズを楽しんでもらえるかな。	手だてⅠーイ、Ⅱーエ、オ
4	アルファベットクイズを楽しんでもらうために、どんなことを工夫できるかな。	手だてⅠーイ、Ⅱーエ、オ
5	アルファベットクイズを楽しんでもらうために、もっと工夫できることはないかな。	手だてⅠーイ、ウ、Ⅱーエ、オ
6	スペンサーさんに楽しんでもらえるようにアルファベットを出題しよう。	手だてⅠーア、Ⅱーエ、オ
7	スペンサーさんは、どんな反応をしてくれたかな。	手だてⅠーア、Ⅱーエ、オ

5 実践と考察

①アルファベットクイズに挑戦した児童A、B (手だてⅠーア、イ、Ⅱーオの検証)

第1時では、前単元で交流したスペンサーさんから届いたアルファベットクイズに挑戦した。「またスペンサーさんから」「どんなクイズだろう」と声が上がり、児童は意欲的に活動に取り組んだ。また、アメリカの風景写真を見て、「ブランコの形が日本と違う」「庭に大きな柵がある」など文化の違いに気付く姿が見られた。児童Bは振り返りに「アメリカのプールがきれいだった」と記述し、異文化への関心を示していた(資料2)。児童Aは「日本が好きになるようなアルファベットクイズを作りたい」と話し、相手に楽しんでもらいたいという思いをもつことができた。その後も、「時計は0に見える」「扇風機も0だね」など、教室内でアルファベットに見えるものを積極的に探す姿が見られ、クイズ作りへの意欲が高まっていた。

資料2 B児の振り返り(第1時)



第2時では、教室や校庭でアルファベットに見える形を探す活動を行った。活動前の話し合いでは、「スペンサーさんが楽しめるクイズ」をテーマに考え、児童Aは「日本らしいものを使ってクイズを作りたい」と発言した。他の児童からも「日本の遊具を撮った方がいい」など、相手を意識した意見が出された。実際の活動では、遊具や植木、フェンスなどを熱心に観察し、「鉄棒を横に見るとEに見える」など友達と相談しながら写真を撮る様子が見られた。さらに、児童Bは給食時間に「きなこパンを撮りたい。日本の食べ物だからスペンサーさんに見てもらいたい」と話し、「I に見える」と発言した。授業時間だけでなく日常生活の中でもアルファベット探しを続ける姿が見られ、具体的な相手を意識した活動を通して、英語への興味・関心や主体的に学ぼうとする意欲が高まったことがうかがえた。

②帯活動「アルファベットの歌」「アルファベットクイズのチャンツ」(手だてⅡーエの検証)

第2時から帯活動として「アルファベットの歌」と「アルファベットクイズのチャンツ」に取り組み、児童が楽しくアルファベットに慣れ親しみ、クイズのやり取りができることを目指した。アルファベットの歌では、テンポが徐々に速くなる曲を用いた。第2時では、児童はゆっくりのテンポで楽しく歌い、テンポが速くなると、児童Aは「こんなの言えるわけじゃないじゃん」と笑顔で話し、「もう1回やりたい」と前向きな姿を見せた。歌うことに消極的だった児童も、速いテンポに合わせて友達と声をそろえながら楽しそうに歌うようになり、休み時間にも歌を口ずさむ姿が見られた。第4時から、「自分の名前の頭文字が呼ばれたら起立する」活動を取り入れたことで、「ぼくはKだからすぐ立てる」「Eは〇〇さんだね」と互いのアルファベットに関心をもち、児童Bも自分の名前のアルファベットを尋ねるなど、意欲的に参加していた。

また“What alphabet?” “How many alphabets?”の表現に慣れ親しむため、アルファベットクイズのチャンツを毎時間行った。第2時は声が小さかったが、第3時以降はリズムに合わせて大きな声

で発話するようになり、児童Aも体を揺らしながら楽しそうに取り組んでいた。活動を重ねることで英語のリズムに親しむとともに、アルファベットの形にも着目するようになり、“O”に見える写真を提示すると、「持つところがC」「Dにも見える」「下はUに見える」など、多様な見方を友達と伝え合う姿が見られた（写真1）。帯活動を継続したことで、児童は楽しみながら英語表現やアルファベットへの理解を深めることができた。



写真1 チャンツの写真

③グループでアルファベットクイズを工夫する活動

（手だてIーイ、IIーオの検証）

第3時から、4人1組のグループでアルファベットクイズの工夫を話し合う活動を行った。児童A、Bともに、スペンサーさんに日本のことを知ってもらいたいという思いをもちながら話し合いに参加していた。児童Aは、日本にしかないものを紹介したいという思いから校庭で見つけた機械の写真を選び、「アメリカにないものを見せたほうが楽しんでくれるのではないかとグループに提案した。また、「アルファベットが真ん中にあるほうが見つけやすい」「少しずつ難しい問題にしたほうが楽しんでもらえる」と、写真の構図や問題の順序についても相手を意識した工夫を考えていた。さらに、答えが見つからないことに気付くと「輪郭をもっと濃くしよう」と提案し、写真の見せ方も工夫した（写真2）。「Uの答えが2つあると違うアルファベットの答えがあった方が楽しんでもらえる」と話すなど、相手に楽しんでもらうことを意識した発言が見られた。

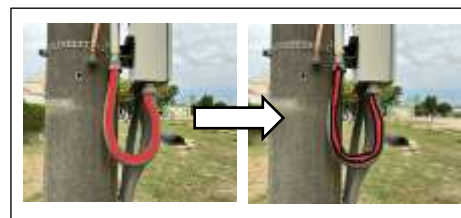


写真2 答えの写真の工夫

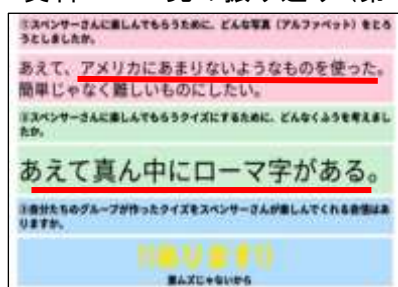


写真3 B児の写真

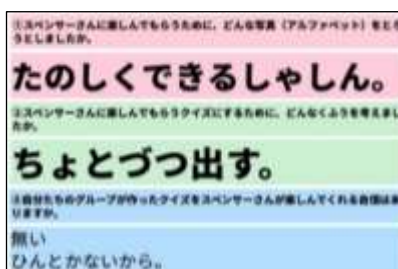
一方、児童Bは、日本の食べ物を紹介したいという思いから、家で作ったコロッケの写真を選び、「コロッケってアメリカにもあるのかな」と相手の立場を考える姿が見られた（写真3）。グループでは、「たくさんのアルファベットが隠れていると楽しんでもらえる」という考えを共有し、“How many alphabets?”の問題を多く考えた。児童Bは「箸の答えはIだね」と提案したが、仲間から「Xにも見える」と意見を受け、アルファベットの形に着目しながら話し合う姿が見られた。

第4時の振り返りでは、相手を意識した考えをもつ児童が増えた。児童Aは「アメリカにないものを使い、楽しんでもらうために難しすぎないクイズを工夫して考えることができた」と記述し、相手を意識した工夫ができたことが分かった（資料3）。児童Bは、アルファベットの答えの数が少しずつ多くなるように問題の順序を工夫していた。一方で、「クイズにヒントがないことで楽しんでもらえないのではないか」と不安な気持ちも記述しており、相手を意識するからこそその課題も見られた（資料4）。グループでの話し合いを通して、児童は相手に伝わりやすく、楽しんでもらえるクイズを考えようとする意識を高めることができた。

資料3 A児の振り返り（第4時）



資料4 B児の振り返り（第4時）



④アルファベットクイズの工夫をより深く考える児童A、B（手だてIーイ、ウIIーエ、オの検証）

第5時では、スペンサーさんにクイズを出題する前段階として、児童同士による中間発表を取り入れた。他グループにクイズを出題することで、予想していなかった解答や相手の反応を知り、楽しめる点や改善点に気付く機会になると考えたためである。帯活動で繰り返し行ってきたアルファベットチャンツにより、“What alphabet?” “How many alphabets?”の表現に慣れていたため、どの児童も楽しそうに英語で出題していた。正解したときには“Good.” “Nice.”、不正解でも“Good idea.”と温かい言葉をかけ合い、相手を受け入れる姿が見られた。また、リズムに合わせて体を揺らしたり、答える相手の顔を見ながら声をかけたりするなど、「相手に楽しんでもらいたい」という意識もうかがえた。一方、解答する側からは「アルファベットの答えが多すぎる」「これはBには見えない」など率直な意見が出され、出題者にとって改善点に気付く貴重な機会となった。児童Bは出題後、「“See

you.” って言った方がいいよね」と話し、クイズの締めくくり方まで相手を意識して工夫しようとする姿が見られた。

中間発表後には、相手の反応をもとにクイズを見直す時間を設けた。児童Aのグループは、「もっと難しい問題にしたい」という思いから、Uを1つ答える“What alphabet?”の問題を、Uを2つと0を1つ答えさせる“How many alphabets?”へ変更した(写真4)。また、Jを答える問題がすぐ解けたことから、「ひっかけ問題を作ろう」と提案し、背景のFにも気付かせる問題へと工夫した(写真5)。このように児童Aは、「もっと楽しんでもらうためにはどうすればよいか」という視点で話し合いを進めていた。

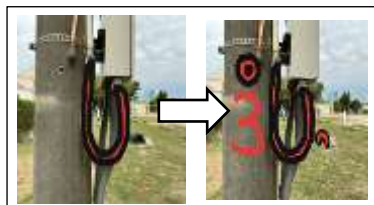


写真4 A児の工夫

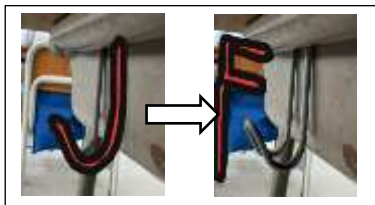


写真5 A児の工夫

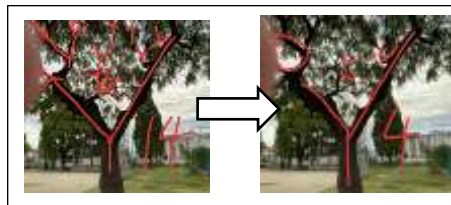


写真6 B児グループの工夫

一方、児童Bのグループは、出題を通して「アルファベットの答えが多すぎると楽しみにくい」という課題に気付いた。14個の答えがある問題には「多すぎてずるい」という意見が寄せられたため、「答えは4～5個くらいがよい」と話し合い、アルファベットの数を調整した(写真6)。このように、児童Bは相手の理解しやすさを意識しながら、クイズの改善に取り組む姿が見られた。

第5時の振り返りでは、児童A、Bともに中間発表を通して自分たちのクイズの課題や改善点に気づき、「もっとよいクイズにしたい」という思いを強めていた(資料5)。中間発表は、相手の反応を基に工夫を見直し、相手意識を高めながらよりよいクイズづくりにつなげる有効な機会となった。

資料5 A児とB児の振り返り(第5時)

⑤アルファベットクイズを出題し、スペンサーさんからの返事に喜ぶ児童A、B

(手だてⅠーア、Ⅱーエ、オの検証)

第6時では、スペンサーさんに送るアルファベットクイズの動画撮影を行った。これまでチャンツに慣れ親しんできたこともあり、出題者だけでなく周囲の児童もリズムに合わせて楽しそうに参加していた。また、実際にスペンサーさんが見る動画であることを意識し、「もう一度撮り直したい」とよりよい動画にしようとする姿が見られた。解答の音声が入らないよう、周囲の児童がアルファベットを体で表現する工夫も見られた。さらに、「Hello.” “Good morning.” で始め、「Thank you.” “See you.” で終わるなど、相手を意識したやり取りを取り入れるグループも多く、「スペンサーさんからどんな返事が来るかな」と反応を楽しみにする児童の姿が見られた。

⑤アルファベットクイズを出題し、スペンサーさんからの返事に喜ぶ児童A、B

(手だてⅠーア、Ⅱーエ、オの検証)

資料6 スペンサーさんからの返事

Thank you for your interesting video! To be honest, most of quizzes were difficult for me, but I got the first one “T” and the sixth “H”.
About the third question, I completely thought that the answer would be J. That can be also correct, right? Anyways, something like fried chickens looked really nice! I want to try it when I travel to Japan someday. Thank you!

資料7 A児とB児の振り返り(第7時)

スペンサーさんからのメッセージを聞いた感想を教えてください。	スペンサーさんからのメッセージを聞いた感想を教えてください。
<u>喜んでくれてよかった。</u>	<u>楽しんでもらえから良かったです。</u>
お相手に楽しんでもらうために、どんなことが大切だと感じましたか。	お相手に楽しんでもらうために、どんなことが大切だと感じましたか。
<u>笑顔で</u>	<u>くふうをする。</u>
アルファベットクイズも作った感想を教えてください。	アルファベットクイズも作った感想を教えてください。
<u>スペンサーさんが喜んでくれて嬉しかったです。またクイズを作りたい。</u>	<u>楽しかった。</u>
今度スペンサーさんとやりとりを、楽しみたいことがあれば教えてください。	今度スペンサーさんとやりとりを、楽しみたいことがあれば教えてください。
<u>でも正解です。</u>	<u>カレーコロッケ</u>

第7時では、撮影したクイズ動画に対するスペンサーさんからの返事を紹介した(資料6)。スペンサーさんがクイズを楽しんでくれたことを知り、児童はとても嬉しそうな様子だった。児童Aは、「Jでも正解だよ」というスペンサーさんからの質問に対して「Jで正

解」と答え、自分たちのクイズについてやり取りする姿が見られた。また、児童Bは、「フライドチキンのようなものを日本で食べてみたい」というスペンサーさんの感想を聞き、「アメリカにコロッケないんだ」と嬉しそうに話し、「カレーコロッケを食べてほしい」と自分の思いを伝えていた。

第7時の振り返りでは、児童A、Bともに「スペンサーさんが楽しんでくれたことがうれしかった」と記述していた（資料7）。単元を通して相手を思い浮かべながらアルファベットクイズを作成し、実際に相手から反応をもらえたことで、学習への達成感や英語で伝える楽しさを実感することができた。

6 研究の成果と今後の課題

（1）仮説Ⅰについて

単元の始めから「スペンサーさんにクイズを届ける」という目的を明確にし、スペンサーさんからのクイズへの挑戦、学級の友達と中間発表、感想を聞く場面など、相手の存在を意識し続けられるような場を段階的に設けた。その結果、児童は「誰に向けて」「どのように伝えるか」を考えながら活動を進める姿が見られた。児童Aは、「スペンサーさんに日本のものを知ってほしい」という思いを強くもっていた。児童同士の間発表をきっかけに、「相手がどう感じるか」を意識するようになった。中間発表後にアルファベットクイズをたくさん変更する姿（前項P. 5写真4、写真5）からも相手意識の高まりがうかがえた。また児童Bは、もともと英語への楽しさを感じている一方で、自分の思いやこだわりを表に出すことが苦手であった。しかし、外国の友達と交流する場面を通じて、「スペンサーさんに日本を紹介したい」という目的が生まれ、日本の食べ物に焦点を当ててクイズ作りに取り組む姿が見られた。話し合いの場面では、「ヒントがあった方がもっと楽しんでもらえるのではないかな」（前項P. 4資料4）と相手を考える姿やクイズを出題する場面では、「最後は See you. と言った方がいいのではないかな」など、相手を意識した発言が増えていった。以上の点から手だてⅠは有効であったと考える。

（2）仮説Ⅱについて

仮説Ⅱでは、「帯活動や英語を楽しく身近に感じられる活動を継続することで、児童が英語に親しみをもち、学習への意欲が高まるのではないかな」とした。そこで、本研究では、速さを変えて楽しむアルファベットの歌、アルファベットクイズのチャンツ、教室や校庭で大文字に見える形を探す活動などを取り入れ、児童が英語を「楽しく」「身近に」感じられる環境を整えた。その結果、「もう一回歌いたい」「もう一回やりたい」といった声が多く聞かれ、児童の日常行動にも変化が見られた。アルファベットのような形を探す活動を行ったことで、掃除の時間には「雑巾掛けが Z に見えるよ」、理科の時間には「この部品 I みたい」など主体的な気付きが増えて、英語学習への意欲の高まりが確認できた。

児童Aは、当初「英語は楽しいとはいえない」という姿であったが、歌やチャンツに積極的に参加するようになり、自分で見つけたアルファベットを使って「これならスペンサーさんも楽しめるかな」と意欲的に取り組む姿へと変化した。単元後のアンケートでは、「英語は楽しいですか」に対して「ふつう」と回答しており、英語への抵抗感の減少と楽しさの高まりが見られた。児童Bは、もともと英語学習に楽しさを感じていたものの、授業中は控えめに過ごす傾向があった。しかし、チャンツや歌の継続的な活動によって積極的に声を出す場面が増え、アルファベット探しでも友達に発見した形を嬉しそうに紹介する姿が見られた。「きなこパンの写真を撮りたい」という発言からは、学びを生活へとつなげていく姿がうかがえた。単元後のアンケートでは、「英語は楽しいですか」に対して「とても楽しい」と回答し、「アルファベットの歌で立つところが楽しかった」と感想に記述しており、帯活動の効果が明確に現れた。以上の点から手だてⅡは有効であったと考える。

（3）今後の課題

本研究では、児童が「スペンサーさんに楽しんでもらいたい」という思いをもって、主体的にアルファベットクイズ作りに取り組む姿が見られた。相手の興味を意識しながら写真選び、ヒントや問題の順序の工夫など、相手意識の確かな高まりが確認できた。また、児童が将来、街中でアルファベットのような形を見ついたり、外国の人と接したりした際に、本単元の授業を思い出してくれるような「心に残る授業」を目指すことが大切だと考える。そのためにも、教師自身が児童の興味関心を高められるような授業改善を継続し、より魅力ある外国語活動にしていく必要がある。今後も授業改善を重ね、児童の学びがより確かなものになるように取り組んでいきたい。